transmigration

転生

仙川環

Senkawa Tamaki

小学館文庫

転生
著者 仙川環

二〇〇六年十月一日 初版第一刷発行
二〇〇七年十月三十日 第五刷発行

編集人――飯沼年昭
発行人――佐藤正治
発行所――株式会社 小学館
〒一〇一-八〇〇一
東京都千代田区一ツ橋二-三-一
電話 編集〇三-三二三〇-五六一七
販売〇三-五二八一-三五五五
印刷所――大日本印刷株式会社

造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、「制作局」(☎〇一二〇-三三六-三四〇)あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。(電話受付は土・日・祝日を除く九時三〇分～一七時三〇分までになります。)
Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写(コピー)することは、著作権法上での例外を除いて禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(☎〇三-三四〇一-二三八二)にご連絡ください。

小学館文庫

©Tamaki Senkawa 2006 Printed in Japan

ISBN4-09-408117-8

この文庫の詳しい内容はインターネットで
24時間ご覧になれます。またネットを通じ
書店あるいは宅急便ですぐご購入できます。
アドレス URL http://www.shogakukan.co.jp

小学館文庫

転　生

仙川　環

小学館文庫

目次

転生……5
解読　土屋文平……318

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

1

回転扉を押して建物に足を踏み入れると、全身の毛穴が縮まった。皮膚を薄く覆っていた汗の膜が瞬く間に剝(は)がれていく。

深沢岬(ふかざわみさき)はうなじにかかる髪を少し持ち上げ、こもっていた熱気を逃がした。

腕時計の針は二時十分前を指していた。約束の時間より少し前に着くことができた。

フロントの脇にベージュの制服を着た案内係が立っていた。脚を前後にずらして重ねている様子は、気取りかえったバレリーナのようだ。

彼女の前を通り過ぎるとき、熱帯のフルーツを思わせるスパイシーな香りが鼻腔をかすめた。今年の夏、イタリアの有名ブランドが発売した新作だ。

岬は手に持っていたバッグを肩にかけなおすと、表面についているロゴマークを隠した。だが、そんな努力が空しいことは、自分の足元を見たらすぐに分かった。爪先が尖ったバックバンドのサンダルが、二年前に流行したデザインであることは、ファッションに関心がある人間なら誰でも知っている。バッグが三年前に限定発売されて話題になった品だったことも、上着の丈が必要以上に長いことも。

自分がうつむきかけていることに気がついて、岬は顎(あご)を振り上げた。

間違っているのだ、何もかも。この自分が流行遅れの服を着ていることも、日当たりが悪い1Kに住んでいることも。

だけど、今日、うまく仕事の話がつけば、こんなしょぼくれた生活に別れを告げられる。

国内で発行部数が最大のビジネスマン向け月刊誌の編集部から仕事を依頼する電話がかかってきたのは、三日前のことだった。

有名雑誌に署名入りの記事が載れば、今後はまともな媒体から注文が来るはずだ。そうすれば、新しい服も靴も、バッグも欲しいだけ買える。二年前、新聞社に勤めていた頃のように。

ロビーに着くと、水色の封筒を手にした男を探した。待ち合わせをしている版元の東雲堂の佐藤とは初対面なので、社名入りの封筒を目印にすることにしていた。

五つほどあるソファは半分ほどが埋まっていた。古めかしいダブルのスーツを着込んだ初老の男が、背筋をぴんと伸ばし、英字新聞を広げていた。引き締まった口元に自信がみなぎっている。その隣では、瞼の上を銀色に塗りたくった中年女が、真っ赤なマニキュアを施した指先を入念にチェックしていた。奥まった席では、二人連れのビジネスマンがノート型のパソコンの画面を見ながらささやきあっている。

岬は回転扉が見やすい位置を選んで座った。

小学生の頃、バトンを持った級友が砂埃（すなぼこり）をあげながらトップを切ってコーナーを回ってくるのを待っていた。あのときのような気分だった。リレーで抜かれたって、たいしたことはない。小首を傾（かし）げて手を合わせ、申し訳なさそうな顔をしてみせれば、級友たちは慰めの言葉さえかけてくれる。だけど、今日は失敗するわけにはいかなかった。

時計の針が二時を五分ほど過ぎたとき、回転扉からサングラスをかけた男が吐き出されてきた。岬は腰を浮かせかけたが、すぐに座りなおした。男はベビーカーを押していたのだ。

岬は回転扉に視線を戻した。

自分がだんだん苛立っていくのが分かった。約束の時間に遅れる人間が嫌いだった。仕事の話をするのだから、時間厳守は当然のことではないか。それとも、相手は自分のことを待たせてもかまわない相手と見くびっているのだろうか。

ふいに目の前にベビーカーが現れた。さっきの男が目の前に立っていた。男は浅黒い肌に映える真っ白な歯を見せて岬に笑いかけ、さりげなく会釈をしてきた。

ここに座りたい、ということだろうか。

ロビーには空席がほかにもあった。

あからさまに眉をひそめてみせたが、男はもう一度、頭を下げた。

そこまでされたら、拒否するわけにもいかなかった。岬は体をずらして、彼が座れるだけのスペースを作ってやった。

男は腰を下ろすなり、貧乏ゆすりを始めた。ソファから振動が伝わってくる。小刻みに動く膝(ひざ)も目障りでならなかった。

妙な男だと思った。室内なのにサングラスを外そうともしない。

席を替えようか、と思い始めたとき、電子音が鳴り響いた。男が慌てたようにポケットから携帯電話を出して耳に押し当てた。一言、二言短く言葉を発すると、男は回転扉に向かって走っていった。

岬の斜め前にベビーカーがぽつんと取り残されていた。無用心だな、と気になったが、自分には関係がないことと考え、回転扉から入ってくる人影に気持ちを集中した。

そのとき、電子音が再び鳴った。今度は岬の携帯電話だった。液晶画面には佐藤の名前が表示されている。岬は深呼吸を一つした。

「お待たせしました、深沢です」

声が上ずっていた。こんなことではいけない。浮き足立っていると思われたくなかった。岬はそっと唾(つば)を呑み込んだ。

「今、ロビーにいらっしゃいますね」

変な質問だと思いながらも「そうだ」と答えると、小さな咳払いの後、佐藤は言っ

た。
「あなたの目の前にベビーカーがありますよね」
「はぁ？」
思わず間の抜けた声が出てしまった。何を言われているのか、分からなかったのだ。
佐藤の言うように、ベビーカーは斜め前、さっきと同じ位置にある。
ベビーカーがどうかしたのか。
そう口にしかけたとき、佐藤が思いつめたような口調で言った。
「深沢さん、その子はあなたの娘さんです。引き取ってもらいたい」
聞き間違えたのかと思った。だが、佐藤は同じ台詞を繰り返した。
岬はベビーカーの中をのぞいてみた。白い日よけ帽をかぶった赤ん坊が、桃のような頬をして眠っていた。
「今日は仕事の打ち合わせですよね。ＪＲの安全対策を検証する特集記事を書いてほしいっていう話だったかと……」
「ああ、その話ね。それはあなたに出てきてもらう必要があったから。申し訳ない」
騙されたということが分かった瞬間、頭の中が白くなった。
「いったいどういうこと？」
考える前に怒鳴っていた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

少し離れた席で、英字新聞を広げていたサラリーマン風の男が、目に非難の色を浮かべて岬を見た。

だが、恥ずかしいという気持ちよりも、怒りのほうがはるかに強かった。こんなふうに他人に心を踏みにじられたのは、実に久しぶりのことだと思った。

東雲堂の本社は飯田橋にある。新宿からなら三十分もあれば着く。これから怒鳴り込みに行ってやる。

「申し訳ない。本当に申し訳ない。だが、少しこっちの話も聞いてもらえませんか」

佐藤の声には、からかうような響きはなかった。それどころか、ひどく真剣だった。いたずらではない、と岬は悟った。考えてみれば、いたずらにしては、手が込みすぎている。

岬はあたりを見回した。ベビーカーを放置して去った男の姿はやはり見当たらなかった。嵌(は)められた、ということなのだろうか。ふと気になって尋ねてみた。

「あなたもしかして、さっきここにいた……」

「ええ」

佐藤はあっさりと肯定した。

携帯電話で呼び出されて出ていったものだと思っていたけれど、あれは自作自演だったのか。アラームかタイマーをセットしておけば、電話を鳴らすことぐらいたやす

い。

ベビーカーのピンクのシートが、目にやけに鮮やかに感じられ、胸騒ぎがしてきた。何かよくないことが起きている。それだけは分かった。今すぐ電話を切り、この場を立ち去ったほうがいい。

仕事の話ではないなら電話を切ると言いかけた岬を強い調子で佐藤が遮った。

「待ってください。その子はミチルという名前で……。詳しいことは言えないんですが、本当にあなたのお子さんなんです。彼女の顔を見てもらえますか」

見てはいけないと思った。それでも、視線がベビーカーに吸い寄せられた。

まさか、と思う。そんなはずはない、と思う。

岬はふらふらと立ち上がっていた。ロボットのようにぎこちない動きで体をかがめた。携帯電話を耳に押し当てたまま、ベビーカーの中を見る。

赤ん坊はさっきと同じ格好で眠っていた。生後三、四ヵ月といったところだろうか。目鼻立ちを仔細に検分した。眉がくっきりとしていて、凛々しい顔立ちをしている。唇はやや厚い。

古いアルバムの写真が脳裏に浮かび上がった。赤い産着を着せられて、割烹着姿で縁側に座る母の腕の中で笑っている赤ん坊。その子の顔が、目の前にいる子に重なって見えた。

岬は悲鳴を上げていた。

「分かってもらえましたか」

インフルエンザにでもかかったかのように、悪寒が背中から這い上がってきた。顔が引きつっているのが自分でも分かる。悪い夢を見ているようだ。

「ベビーカーのシートの裏のポケットを確認してください。封筒が入っています。当面の養育費として、いくばくかの金と出生届を用意しておきました。あなたは三ヵ月前、アメリカでその子を産んだ。父親はいない。あなたは、日本で仕事が落ち着くまで、その子をアメリカの知人に預けていたという筋書きです」

「むちゃくちゃなこと言わないでください」

「アメリカで必要な手続きはすませました。海外で出産した場合は、三ヵ月以内に日本で出生届を出せば、受理される。今日から十日後、つまり八月二十二日までに、あなたは役所に行ってください」

「そんなこと……。今すぐこの子を迎えにきてください。さもなければ、ホテルの人に事情を話して警察を呼んでもらいます」

「それは、やめておいたほうがいい」

「だって私には関係ないことですから」

電話を耳から離そうとしたとき、佐藤が鋭い声で「待て」と言った。

「関係ないことはないでしょう。そのことは、深沢さん、あなたにももう分かっているはずです。去年のことを忘れたとは……」
「待って」
聞いているのが耐え切れなくなり、岬は佐藤を遮った。
やっぱり、という気持ち。なぜ、という気持ち。両方が胸を激しく交錯して、うまく考えをまとめることができなかった。
「話が違うじゃないですか」
弱々しく抗議するのが精一杯だった。
「申し訳ない。手違いがあったんです。経済的なバックアップはします」
「そんなこと、できるはずないでしょう」
「やってもらう。それしかないんだ」
「だめです。やっぱり警察に届けるわ」
「それなら、こっちにも考えがある。去年何があったのか、ありのままのことを警察に伝えるし、マスコミにも話を売り込む」
周囲の酸素濃度が下がったような気がした。
「東都新聞の記者だったあなたになら分かるでしょう。全国紙の社会面のトップを飾ってもおかしくない話だ。出生届を出したかどうかを二十二日の夕方に確認させても

らいます。もし出ていなかったら、そのときは覚悟をしてもらいたい」

電話を握り締めても、唇をきつく結んでも、体の震えを止めることはできなかった。マスコミが嗅ぎつけたら、どうなるかは分かりきっていた。自分なら、こんなおいしい材料を拾ったら、盛り上げまくってしゃぶり尽くす。

岬は冷たい汗を握り締めて、天井を見上げた。シャンデリアが放つ柔らかな光は、落ち着きを取り戻すのに少しだけ役に立った。

この子を引き取るわけにはいかない。去年のことを警察やマスコミに暴露されるのも困る。そうなると、自分の選べる道は一つしかなかった。佐藤という男の正体を突き止め、ミチルという子の本当の親を見つける。そして、彼女を返すことだ。

方針が決まると、少し気持ちが落ち着いてきた。

自分が佐藤のことを知らないから、無理難題をふっかけられているのだ。去年のことをばらされたら困るのは、自分ばかりではないはずだった。しらばっくれようがない状態まで持っていけば、同じ土俵に引きずり出せば、相手もこんな強硬な態度に出られるはずがない。

「少し考えさせてもらえませんか」

岬は言った。

やってやろうじゃない。取材してやろうじゃない。だてに十年も記者をやっていた

わけではない。

「そうですか……。では、深沢さん、今日のところはあなたがミチルを連れて帰ってください」

とりあえず、同意するしかなかった。

最後に佐藤は、しんみりとした口調で言った。

「あなたの娘さんなんです。ひとつよろしくお願いします」

勝手にほざいていろ。

心の中で吼えると、岬は乱暴に電話を切った。

電話をバッグに戻すと、こめかみのあたりを親指で揉みながら、腕時計を見た。電話がかかってきてから、五分ほどしかたっていなかった。英字新聞を広げている男は、さっきと同じページに視線を落としている。ベージュの制服を着た従業員はきびきびとした動作で動き回り、キャスター付きのスーツケースを引っ張ったビジネスマンが目の前を横切る。異次元から帰還したかのような感覚を覚えた。

ベビーカーの中をのぞいてみた。ミチルは淡いピンクの唇をわずかに開いて、軽く寝息を立てている。

冗談じゃない。

神経が昂ぶっているせいか、体中がほてっていた。アイスコーヒーでも飲みたい気

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com